

2015年度川崎市文化賞受賞の言葉 - 登戸研究所の調査・研究・保存の活動が評価され光栄です -

著者	渡辺 賢二
雑誌名	明治大学平和教育登戸研究所資料館館報
巻	2
ページ	1-2
発行年	2016-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10291/21333

2015年度川崎市文化賞受賞の言葉 —登戸研究所の調査・研究・保存の活動が評価され光栄です—

渡辺賢二

明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員

2015年度川崎市文化賞を受賞しました。私自身、たいしたことをしてきた自覚はないので最初はとまどいました。しかし、受賞理由を見てこれは私が個人的に受賞したのではなく、多くの皆さんと一緒にやってきたことが評価されたのだと知り、得心しました。

受賞の理由には「陸軍登戸研究所の発掘・調査・保存に貢献」したことがあげられています。しかも「長年にわたって高校生・市民と共に調査」していたことが書き添えられていました。多くの皆さんのご指導ご鞭撻のおかげでもあります。

いまから31年前の1985年、川崎市は教育委員会主催の平和・人権学習を開始しました。それには市民が企画委員として参加し、自主的に運営し学ぶことが出来ました。私は法政二高に勤務していましたので、早速、生徒をつれて参加しました。1986年度からはじめましたが87年度は、ただ講師の先生の話聞くのではなく自分たちで地域の戦争を調べてみようということになりました。川崎空襲の傷跡などを調査するところからはじめました。川崎市北部を調べていたときのことで、東京新聞の記者から「このあたりで戦争末期稲が実らなかった事件があった」と聞きました。どうも現在の明治大学生田キャンパスに秘密の研究所があったということです。すぐに、行ってみました。明治大学農学部が使用していて、古い建物が沢山ありました。そして目立たないところに「動物慰霊碑」と書かれた3メートルくらいの巨大な石碑がありました。「どんな動物を実験に使ったのだろうか」と企画委員のメンバーで話し合いました。碑の後ろには「昭和十八年三月建之」と「陸軍登戸研究所」と記載されていました。「大変な研究をしていた可能性がある」とは思いました。そこで防衛庁（現・防衛省）防衛研究所について資料調査をしてみました。ところが基本資料になるものは皆無でした。資料がないから明らかにならないことを実感しました。ところが高校生や市民と一緒に活動したことが活路を開いたのです。数回目の見学会の時でした。私たち以外に高齢の方がついてきました。「ここにお勤めでしたか」と聞くと「そうだ」というのです。井上さんという方でした。この出会いがなかったら永久に歴史から消えていたともいえるかも知れません。「みんなこのことは墓場まで持っていこう、と別れた」といいました。しかし、戦後40年以上経って「青春を消しさるのが苦しくなって最近近くから通っていた仲間と会をつくった」というのです。一緒に参加し

ていた仲間が「アンケートを採ろう」といいました。99名の方に出したら、26名の方から返事が来ました。その中のお一人、15歳でタイピストとして勤めていた小林コトさんから「資料を持っている」という返事をいただきました。少女だった人が持っているのだからたいしたものではないのではないか、との思いは覆されました。960枚を超える綴りだったのです。この資料提供が登戸研究所の歴史をひもとくもとになりました。

その後、法政二高と長野県赤穂高校生が関係者から聞き取りをしました。関係者は、「大人には話さないが高校生には話そう」と言って、秘密研究所の実態が浮かび上がりました。さらに重要なことは登戸研究所に勤務していた方々がつくる登研会が明治大学に資料館設置を求めたのです。市民の保存を求める動きも進む中で明治大学が英断を下し資料館設置を決め、2010年4月から明治大学平和教育登戸研究所資料館を開館しました。このように、いろいろな力が結びあい、歴史に埋もれようとしていた秘密戦研究所がしっかりとした資料館になりました。科学が戦争に動員される時どうなるか、秘密戦とは何か、私たち自身の問題として一緒に考えたいと思います。

〔渡辺賢二氏プロフィール〕

法政大学第二高等学校教諭時代より四半世紀以上にわたり、市民、高校生たちと共に登戸研究所の実態について発掘・解明してきたパイオニア。2015年川崎市文化賞受賞。現在、明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員。主著に『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）。